

2023年2月26日 主日礼拝

説教題「召使たちは知っていた」ヨハネ福音書2章1～11節

主任牧師 加藤 誠

**「このぶどう酒がどこから来たのか、水を汲んだ召使たちは知っていたが、世話役は知らなかった」(ヨハネ2章9節)**

先週の22日(水)から「受難節」(レント)に入りました。今年の受難節はヨハネ福音書における主イエスの十字架に向かう道行きをたどりながら、主の受難の意味と、復活に込められたメッセージを受け取っていきたくと願っています。

さて今朝はヨハネ福音書で「最初のしるし」と呼ばれている「カナの婚礼」の場面を読みました。婚礼という喜びの食卓においてぶどう酒は欠かせない大切なものですが、このときは予想以上のお客が押し寄せたのか、ぶどう酒が足りなくなる非常事態に陥ります。主イエスの母マリアは新郎新婦と近い関係であったのでしようか、裏方の人々の窮状を知りまして、自分の息子に「ぶどう酒がなくなりました」と告げたのでした。このとき主イエスは「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と、冷たく突き放したような応答をされたのですが、結果的には水をぶどう酒に変える奇跡をもって、この婚礼の危機を救い、新郎新婦の新しい門出を祝福してくださったのでした。婚礼に参加しているすべての人の笑顔が見えてくるような、うれしく、美しいエピソードです。

ただ、この奇跡がなぜ主イエスの「最初のしるし」としてこれほど大切に紹介されているのだろうか?…と考えると、わたしは首をかしげざるをえないのです。「しるし」というのは英語役の聖書で **miracle** とか **sign** と訳されている言葉です。「このイエスこそ神の遣わされた救い主である」ことを証する「奇跡」であり、大切な「証拠」ということです。この「カナの婚礼の奇跡」は、つまるところ「ぶどう酒が足りなくなり困っていたら、主イエスが水をぶどう酒に変えて助けてくれた!」という話であり、意地悪く言うなら「ドラえもんと何が違うの?」と思わないでもありません。これはわたしの感覚ですが、主イエスが救い主であることを証言する「最初のしるし」としては少し「軽い感じ」がしないでもないのです。

なぜヨハネ福音書はこの「カナの婚礼の奇跡」を「最初のしるし」として重きを置いて紹介しているのか。わたしなりに思い巡らす中で、主イエスがここでユダヤ教の「清めの水」を不要なものとした点に、とても深い意味が隠されているのではないかと受け止めています。「清めの水」は神の前に「ケガレたもの」を排除し清める大切なもの、神を礼拝する食卓に不可欠な水でした。しかしながら「清めの水」によって「お前はケガレていて神の前にふさわしくない」と排除された人たちがいました。「伝染性の病気の者」「障がい者」「不浄な職業の者たち」など、また「生理期間中の女性」も「清めの水」をもってしてもケガレを落とすことができ

ない。そのために食卓からは排除されたのです。つまり「清めの水」は神の礼拝にふさわしい者とふさわしくない者とを分断する水でもあったのです。主イエスはその「清めの水」を「最良のぶどう酒」に変えられました。「最良のぶどう酒」、それは十字架にあらわされた神の永遠の愛でしょう。「もう清めの水はいらない。罪ある私たちに今日も注がれている神の永遠の愛を受け取り、分かち合いたいと思う者は誰もが食卓に招かれている」。そのようにして、主イエスは婚宴の食卓の「質」を大きく変革されて、食卓につく人々の顔触れを大きく変えてしまわれたのです。婚礼に招かれていたお客たちは「最良のぶどう酒」を飲むことができ大喜びだったでしょうが、ユダヤ教の教師たちは眉を吊り上げていたのではないのでしょうか。「大切な清めの水のない食卓はけしからん！誰がこんなことを許したのか？」と。しかしこの食卓の「質」を変え、そこに形づくられる交わりの「質」を変えることこそ、主イエスが神に遣わされた救い主として成し遂げられた大切な「救いのしるし」だったのです。主イエスはこの「カナの婚礼の奇跡」において、十字架にあらわされた神の愛を前もって指し示し、その神の愛のもとに形づくられる神の国の喜びの食卓を示してくださったのでした。

もう一つ、この「カナの婚礼の奇跡」で注目すべきは、主イエスが水をぶどう酒に変えられたことを、婚礼の世話役をはじめ、お客のみんなは誰も知らないでいる。主イエスは表舞台からはご自分を隠されて、裏方に徹しておられるという点です。これだけ人々を喜ばせる奇跡をさされていながら、主イエスは一切賞賛を受けておられません。これは数週間前の朝の祈祷会で榎本弘さんが説教で語られたことでした。ここで主イエスのご自分を隠し、私たちの気づかないところで、私たちのための救いのわざをなされている。一人ひとりの人生においても、また教会の働きにおいても、私たちの目に隠れたところで働かれている主イエスがおられる。このメッセージは「目からうろこ」で新しい発見でした。なんとうれしいことでしょうか。

ただこのとき、主イエスが成し遂げられた救いの御業を知っていた者たちがいました。水がめに水を運んだ召し使いたちです。「ぶどう酒がなくなったのに、なぜ俺たちが水を汲まなければならないのだ？」。彼らは疑問に思いながらも、しかし母マリアの言葉、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」に忠実に従ったのです。召し使いに求められることは忠実です。その時には「なぜ神さまはこれをせよとわたしに言われるのだろう」と意味が分からなくても、神さまは必ずその意味がわかる時を備えてくださると信じて忠実に従う時、召し使いたちは主イエスの尊い御業を体験する者とされたのでした。私たちがまた、主イエスのお手伝いをするようにさまざまな形で神さまから声をかけていただくときがあります。その時にはただちに意味が分からなくても、その働きが裏方の小さな働きであったとしても、「はい」と応えて従う信仰をいただいでいきたいのです。